

旭ヶ丘小学校開校五十周年

旭ヶ丘小学校

昭和四十六年、旭ヶ丘小学校が開校しました。校舎は市内で初めてとなる鉄筋コンクリート製、子どもも大人も総出で取り組んだ造園植樹作業、職員がアイデアを出し合い創りあげた校歌。学校草創期の苦労や新しい学校を創るといふ情熱は、十周年記念誌から伺い知ることが出来ます。



「開校式の様子」

月日が流れ、本年度開校五十年を迎えました。周年行事に

る予定でした。その予定を新型コロナウイルスに阻まれる形となり、周年事業については延期しました。

その後感染状況が落ち着いてきたことから、一部の周年事業を推進することで決定がなされました。運動会や音楽会は記念大会という形から変更し、記念式典は開催を断念せざるを得ませんでした。記念品、記念撮影、記念誌制作については制作を行うこととなりました。「子どもたちが五十年目の年に旭ヶ丘小であった」という証を残したいという願いも込められています。

十一月に航空写真と全校記念写真の撮影を行いました。ソーシャルディスタンスを確保し、ドローンを使った撮影。子どもたちが首からかけたパネルを大きく広げ、全校で校章を形作り、撮影を終えることができました。記念誌については準備委員会の段階から「手にとって気軽に読みたくなるようなコンパクトなもの」「フルカラーで学校

の今がわかるもの」という編集方針が出されており、これに従って制作に入りました。クラスページを入れ、子どもたちの様子も記録として残す予定です。今年度も終わりが近づきましたが、本校の周年行事はいまだ始まったばかり。コロナ禍の



今、できないことを嘆くのではなく、できる範囲の中で最大限に取り組むよう、周年事業を推進していきます。

何もなかったところから学校をつくり上げた先達の教えと情熱に学びながら、新しい時代にいきる子どもたちとともに、五十年の節目を迎えたいと考えています。(関谷 敏)

各校の教育活動特集

常盤祭

「例年通りにはできないけれど、校友会活動の集大成として、全校で盛り上がりた。特に、まだほとんど学校に行けていない一年生には、常盤中の良さや雰囲気を感じてもらいたいと思う。」

これは、五月に常盤祭の開催について模索している段階での校友会(生徒会)役員の意見です。この思いに後押しされ生徒会顧問が中心となり、職員間で

常盤中学校

そして生徒間で内容や時間、会場等について、何度も議論がなされました。

役員は全校が参加できるように工夫を凝らしました。ビデオ撮影によるクラス紹介、未成年の主張や個人の特技を披露するフリーステージ、さらに学校中に会場を分散したクイズ大会では、役員が臨機応変に対応し、どの教室にも笑顔が溢れました。翌週の、「ソーシャル



ディスタンス体育祭」では、校庭を元気に走り回る生徒の姿が見られました。

自然とそそい一つの大きな拍手子となる瞬間がありました。全校の一体感が生まれた素晴らしい常盤祭でした。(中村 文成)

今できることで

豊洲小学校

コロナ禍において多くの変更をせざるを得なかった本年度の学校行事。各学校では様々な工夫がなされたのではないでしょう。本校では、受付での検温、入場者数制限、三密回避等の対策を念入りに行ったうえで運動会や音楽会に代わる学校行事を執り行いました。

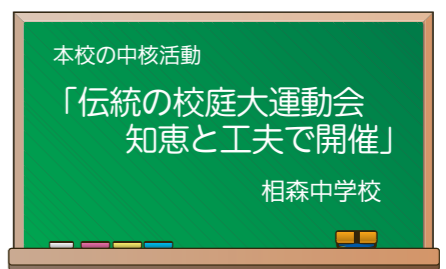
運動会に代わり「スポーツ交流会」として、短距離走と連学年種目を実施しました。今年度より多様な関わりによって子どもたちを支援していくために、

連学年で合同教科学習や協働的活動に取り組んでいます。体育の授業では連学年で玉入れ、リレー、綱引きに取り組み、その成果の発表の場をスポーツ交流会の中に位置づけました。

また、音楽会に代わり「器楽合奏発表会」として、歌唱は控え合奏のみの発表会としました。使用楽器はリコーダーや鍵盤ハーモニカの個人持ち楽器を中心とし、音楽の授業で練習すればできるよう楽譜を簡易にしたり、曲を短くしたりしまし



た。どちらの行事も子どもたちからは「友だちと発表できて楽しかった」と充実感が伺えました。ウィズコロナの中、今できることを考える教師の姿は、子どもたちに伝える力を育んでいくものと信じていきたいと思えます。(酒井 直治)



今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で様々な活動が変更を余儀なくされている中で、本校の教育活動の中核でもある校庭大運動会も大きな変更を加えて実施することになりました。

例年なら全校で紅白に分かれ、「騎馬戦」や「竹引き」、「綱引き」、「リレー」などの競技種目で勝敗を競ったり、各学年で練習を重ねてきた表現種目(二年のスタンプ、二年のソーラン節、三年の行進)を披露したりと保護者の方々や地域の皆様も楽しみにしている一大行事です。しかし、今年度はできるだけ密集や密接を避けながら活動することを意識した種目や日程を検討し、生徒会を中心とした生徒たちとも一緒に考え、伝統を守りながらも新しい形で七十三回目の運動会を



今後の状況にはまだまだ不確かな点が多いですが、本校の伝統であり、中核活動でもある校庭大運動会について、大切な伝統として残していきたいながら、新しい生活様式に対応した工夫を取り入れ、これからも生徒とともに生徒が育つ運動会を創り上げていきたいと思えます。(吉田 正人)

本校の宝 77

「二十歳の無伴奏混声四部合唱の校歌」

東中学校

東中は、「小さな学校の大きな合唱」を合い言葉に、日々の学活の時間には歌声が響き、定期的に歌声発表会を設けるなど合唱活動に力を入れている。しかし、本年度、コロナ感染防止のために、マスク着用の練習、発表会は、屋外でソーシャルディスタンスを確保するなど制限された合唱活動となっていました。

積極的な合唱活動ができなくなったが、こんなときだからこそ、大切に歌いたい東中にしかない合唱曲があることを文化祭前の校長講話で再認識した。



本校の校歌は、「無伴奏混声四部合唱」で、いつでも、どこでも歌うことができる曲だが、最初から合唱曲として作られたのではない。この「無伴奏混声四部合唱」の校歌は、平成十二年に作られた曲である。当時の三年生が修学旅行先においてピアノ伴奏なしで歌った合唱に、物足りなさを感じ、自校の校歌をいつでもどこでも歌える四部合唱曲にしたいと思い作られたものである。つまり、現在歌っている校歌は先輩の思いから作られた曲であることを生徒のみならず、職員一同理解した。改めて歌詞や無伴奏混声

たので小さな学校の大きな合唱を残せるように東祭、親善音楽会では、堂々と校歌を歌いたいです。」といった校長講話の感想のように、今年度の東祭の音楽会の校歌は、より特別な曲として歌われ、生徒の思いが込められていた。コロナ禍に負けない素敵な音楽会を開催することができた。二十歳を迎えた東中の無伴奏混声四部合唱の校歌は、本校の宝だ。(嶋田 和美)